

鶴田町農事普及だより

(7月号 令和7年7月1日～7月31日)



〔発行〕鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町農業振興課
つがるにきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北農林水産事務所農業普及振興室

★農業機械による 農作業事故にご注意を！

農作業シーズンに伴い、トラクター、スプレヤー、草刈機等、農業機械による事故が多発しています。農作業中の安全確認や適切な服装を心掛け、農作業中の事故に注意しましょう。



このホームページでは、農作業全般の安全に関する情報が掲載されているよ。

農作業安全情報センター
(農研機構)

★熱中症予防運動展開中！

県では近年増加傾向にある農作業中の熱中症を予防するため、「熱中症予防運動」を実施し、熱中症対策の徹底を図っています。熱中症の正しい知識を身につけ、健康被害を防ぎましょう。

○運動期間及び活動内容

- 令和7年6月1日(日)～8月31日(日)
- 啓発資料(チラシ、ポスター等の配布)
- ラジオ、ホームページ等の情報発信及び各地域での啓発活動

農作業中の熱中症対策のポイント

- ◎高温時の作業は避けましょう
- ◎こまめな休憩と水分・塩分補給を行いましょ
- ◎1人での作業はできるだけ避けましょう
- ◎熱中症対策グッズ(帽子・空調服等)を活用しましょう

★農業経営収入保険の保険料助成率引上げについて★

町では、「農業経営収入保険」への加入を促進し、農業者の経営安定と負担を軽減するため保険料に係る支援をしておりますが、一層の加入促進を図るため、令和8年度より、保険料の助成率を次のとおり引き上げることを決定しました。この機会に農業経営収入保険への加入をご検討ください！

- 新規加入：50%
- 継続加入：30%
- (引上げ前は一律10%)

○収入保険制度とは … オールリスクに対応できる保険です。農業者が保険期間に生産・販売する農産物の収入全体を対象として、収入が基準収入の9割(補償限度)を下回った場合に、下回った額の9割(支払率)を補てんする制度です。加入するためには、青色申告をしていることが条件です。

★農業関連の各種補助事業を活用ください！

町では、農業関連の補助事業を実施しております。申請方法等の詳細は、町ホームページをご覧ください。



詳しくはこちらから！



農業補助金



気象

(令和7年6月26日 仙台管区気象台発表
東北地方1か月予報より)

向こう1か月の天候は、平年に比べ曇りや雨の日が少ない。
平均気温は、高い確率80%で、特に期間の前半は気温がかなり高くなる見込みである。
降水量は、少ない又は平年並の確率ともに40%である。



水稻

1. 生育状況(6月20日現在)

「まっしぐら」は、平年と比較して、草丈は並、茎数は大幅に多く、葉数は並で、生育の進度は平年並である。
「青天の霹靂」は、平年と比較して、草丈は並、茎数はかなり少なく、葉数は並で、生育の進度は平年並である。
「はれわたり」は、平年と比較して、草丈はかなり長く、茎数はかなり少なく、葉数はやや少なく2日程度遅れている。

今後、平年を上回る気温が予想されることから、生育は早まると見込まれる。

2. 水 管 理

(1) 分げつ盛期～穂首分化期(6月下旬～7月上旬)

1株当たり茎数を「まっしぐら」、「はれわたり」は20本程度、「青天の霹靂」は18本程度(栽植株数が70株/坪程度の場合)確保した水田では、晴天で高温(平均気温20℃以上)が続くような時は中干しを行う。
中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びの抑制、根腐れ防止等の効果がある。中干しを行う場合は、田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では2回くらい繰り返すと効果的である。ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は行わない。また、幼穂形成期までに必ず終える。

(2) 幼穂形成期

幼穂形成期(主茎の幼穂長2mm、出穂前25日頃)から穂ばらみ期にかけては、花粉が形成され、また、稲の吸水量が多くなり、低温や干ばつに弱い。このため、幼穂形成期に達したら、気温の高低に関係なく水深10cmで10日間の「幼穂形成期深水かんがい」を実施する。

(3) 穂ばらみ期

穂ばらみ期に当たる出穂前20～11日頃(主茎の葉耳間長が-12cm～+4cmの頃(「図-1 葉耳間長の見方」参照))は、最も低温に弱い。日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下になると予想される場合には、可能な限り深水(15～20cm程度)にして幼穂を保護する。ただし、冷水を急に入れると水温が下がるので、徐々に水を深くする。
高温時は、4cm程度の浅水にし、時々水の入れ換えを行い、根の老化を防止する。

■これからの水管理

生 育 期	暖かい日	寒い日	備 考
分げつ盛期～穂首分化期 (6月下旬～7月上旬)	中 干 し	5～6cm程度の深水	中干しは幼穂形成期までに終える。
幼 穂 形 成 期 (出穂前25日頃)	幼穂形成期深水かんがい (水深10cmで10日間)		
穂 ば ら み 期 (出穂前20～11日頃)	4cm程度の浅水 時々、水の入れ換え	15～20cm程度の深水	日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下で、障害不稔発生の危険が増す。

3. 追 肥

幼穂形成期(主茎の幼穂長2mm)に達し、肥料が切れて葉色が淡くなっていれば追肥の適期である。

(1) 「まっしぐら」、「はれわたり」

追肥量は、「まっしぐら」、「はれわたり」では窒素2～3kg/10a程度とする。

幼穂形成期に達しても葉色が濃い場合は、幼穂形成期後7～10日までの間に葉色が淡くなったら追肥し、この時期を過ぎても葉色が淡くならない場合は、追肥しない。

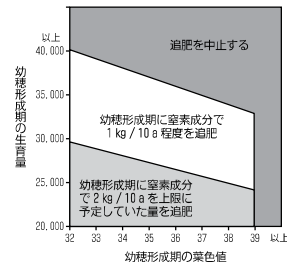
また、出穂前後の追肥(実肥)は、米の食味・品質を低下させるので行わない。

(2) 「青天の霹靂」

追肥時期は幼穂形成期とし、それ以降は行わない。

「青天の霹靂追肥判断カラスケール」等を用い、実際に生育調査を行った上で、栄養診断基準を参考に追肥の有無・追肥量を決定する。生育後半に土壤窒素の発現量が多い水田では、追肥しない。

生育指標 (幼形穂の草丈 ×n(当たり茎 数×葉色値))	10a当たりの追肥 対応(窒素成分量)
95万未満	幼穂形成期に窒素成分で2kg/10aを上限に予定していた量を追肥
95万以上 129万未満	幼穂形成期に窒素成分で1kg/10a程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



注) 幼穂形成期の生育量は $\text{草丈} \times n(\text{当たり茎数})$ で算出、葉色値は葉緑素計で測定。

4. 病虫害防除

(1) 斑点米カメムシ類

水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているため、雑草が開花・結実しないよう刈取や耕起をこまめに行う。なお刈取りは出穂1週間前(7月25日頃)までに終了する。

水稻の出穂以降に雑草を刈り取る必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を水田に散布した後、速やかに行う。

ノビエ、シズイ、クログワイの多発田では、水稻の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。

(2) 葉いもち

葉いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されている。早期発見・早期防除が基本であり、発生状況に十分注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。

(3) 稲こうじ病

穂ばらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなる。
土壌伝染性病害であるため、前年発生した水田では必ず防除を行う。
銅剤の効果が高く、防除適期は出穂20日前～10日前であり、防除時期が遅れると、防除効果の低下や薬害の恐れがあるので注意する。

中耕・培土をしっかりと行い、品質向上に努めよう！

2. 除 草

発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。

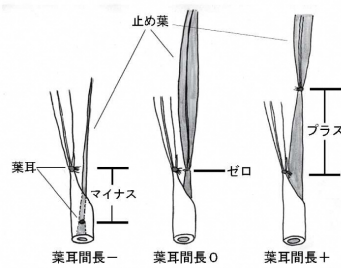
(1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布

雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。

(2) 広葉適用除草剤の茎葉処理

広葉雑草に効果のある茎葉処理薬剤は大豆バサグラン液剤やアタックショット乳剤、パワーガイザー液剤がある。以下の注意点を確認のうえ使用する。また、薬剤により使用時期が異なるため注意する(パワーガイザー液剤は、一年生雑草に適用)

図-1 葉耳間長の見方



葉耳間長の見方(松島省三による)

薬 剤	薬害の助長を防ぐための注意点
大豆バサグラン液剤	●高温時や大豆の生育が不良な場合は使用を避ける。 ●重複散布を避ける。
アタックショット乳剤	●大豆の生育が不良な場合は使用を避ける。 ●重複散布を避ける。 ●他の茎葉処理剤(イネ科対象剤を含む)と混用しない。
パワーガイザー液剤	●大豆本葉1葉期以降の処理は薬害程度が大きく、収量に影響はないが、生育量を抑制し、大豆による遮光効果が遅延する。

(3) 畦間、株間処理

土壌処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できるので、薬剤の特性に合わせ効果的に利用する。
大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

3. 追 肥

子実を充実させるため、開花期前後に追肥する。追肥量は、窒素成分5～8kg/10aであるが、生育状態に応じて加減し、生育が旺盛な場合は行わない。



6月21日現在、県生育観測ほ(板柳町五幾形)のふじの果実肥大は、横径3.5cmで平年を2mm上回っている。

1. 摘果の見直し

良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地では、再度園地を見回り、摘果の見落としがないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検する。なお、標準着果量が中心果で確保できない場合は、側果の中から形質の良い果実を残したり、障害の程度をよく見極めて障害の程度が軽い果実を残して、標準着果量を確保する。

3. マメコバチの巣箱の回収と管理

本年も前年同様、管内全域でマメコバチの数が少ない傾向があった。適切に管理し、マメコバチの増殖を促す。

マメコバチを天敵から守るため、巣箱は薊ができる7月上旬ごろに回収し、できる限り涼しい小屋の軒下などにまとめて保管する。この場合、ネズミの被害や雨水の跳ね返り为了避免するため、地面からできるだけ離す。また、箱の積み重ねや雨よけにも配慮し、巣筒の内部が過湿にならないように注意する。

■薬剤散布(県りんご防除暦より抜粋)

時期と散布量	主な対象病害虫	基 準 薬 剤
7月初め (500ℓ/10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモシンクイガ キンモンホソガ	ビレスロイド剤
		アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はバスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はチウラム剤 500倍 又はオキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤 800倍 又はオゾンサイド水和剤80
7月半ば (500ℓ/10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシンクイガ リンゴコカクモンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はバスポート顆粒水和剤 1,000倍 又はオキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤 800倍 又はオゾンサイド水和剤80
		オキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤 800倍 又はオゾンサイド水和剤80 又はアリエッティC水和剤 800倍 又はダイパワー水和剤 1,000倍 又はペフラン液剤25 1,500倍
7月末 (500ℓ/10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホソガ ハダニ類 モモシンクイガ	オキシラン水和剤 500倍 又は有機銅剤 800倍 又はオゾンサイド水和剤80 又はアリエッティC水和剤 800倍 又はダイパワー水和剤 1,000倍 又はペフラン液剤25 1,500倍

(1) 腐らん病、褐斑病

本年も腐らん病の発生が見られている。摘果後のつる(果柄)から侵入・感染するので、果台につるが残らないようにする。枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。胴腐らんは、処置が不十分であったり、誤った処置が行われている園地もみられるので、再発病斑を含め、削り取り法か泥巻き法のいずれかの処置を適切に行う(右記QRコードより動画でそれぞれの治療方法を確認できる)。胴腐らんの発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採し、速やかに園外へ搬出する。

粗皮感染による胴腐らんの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」に**トップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。**



QRコード1:
トップジンM
オイルペースト



QRコード2:
パッチレート



QRコード3:
泥巻き法

町農業委員会では、毎年6月上旬から農地パトロールを実施し、遊休農地や、放任園等の発生防止に取り組んでいます。
農地の貸借や売買については、町農業委員会へご相談ください。



- (2) **褐斑病**
前年、果実病斑も発生した褐斑病は、散布ムラがある場所から発生が増加することが多い。散布ムラをなくすために散布量や散布ルートの見直しを行う。
また、感染拡大を防ぐため、自圃地の状況をよく確認し、被害葉・果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
感染が拡大しやすい「**7月半ば**」又は「**7月末**」に**オンリーワンフロアブル2,000倍も使用する**。
- (3) **ハダニ類**
発生動向を見極めながら適正な防除を行う。散布の目安は1葉当たり2個体以上あるいは寄生葉率50%以上である。殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、年2回以内使用のものでも年1回の使用とする。
ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニコングフロアブルは合わせて年1回の使用とする。
ダニオーテフロアブルは銅剤（有機銅剤及びオキシラン水和剤）と混用しない。銅剤を散布した後は使用しない。また、散布後に銅剤を使用する場合は10日以上散布間隔をあげる。

■ リンゴハダニとナミハダニに対する殺ダニ剤の適用表

薬 剤 名	倍数	使用時期	年間 使用回数	リンゴハダニ	ナミハダニ
サンマイト水和剤	1,500倍	収穫21日前まで	1回	○	×
バロックフロアブル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	○	×
カネマイトフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで	1回	×	○
※オマイト水和剤	750倍	収穫3日前まで	1回	○	○
コロマイト乳剤	1,000倍	収穫前日まで	1回	○	○
マイトコーネフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	1回	×	○
ダニサラバフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	○	×
スターマイトフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
ダニコングフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
エコマイト顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	×
ダニオーテフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	1回	○	○

※オマイトは7月下旬までの使用を避ける。

- (4) **モモシクイガ**
無袋栽培では、毎回防除剤を散布する。
7月初めにピレスロイド剤（バイスロイドEW、サイハロン水和剤、アーデントフロアブル、イカズチWDG）を散布した場合でも、モモシクイガやナシヒメシクイの発生が見られている園地及び周辺に発生源がある園地では、7月半ばのシンクイムシ類防除薬剤を省略しない。
- (5) **リンゴコカクモンハマキ**
第1世代又は第2世代幼虫の発生が多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル10の5,000倍、エクシレルSE5,000倍、テッパン液剤2,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍、ヨーバルフロアブル10,000倍、ディアナWDG10,000倍、デリゲートWDG10,000倍のいずれかを散布する。

- (6) **クワコナカイガラムシ**
発生の多い園地では、7月下旬と8月上旬に防除剤による胴木洗いを手散布で行う。また、6月下旬にバンド巻きをした園地では、7月中旬（卵のふ化前）に忘れずにバンドを除去し、適正に処分する。

■ カルシウム剤の使い方

資 材 名	散布時期（散布間隔）	資材形状	倍数	散布回数
ス イ カ ル	6月上旬～9月中旬（10日以上）	粉状	300倍	3～5
セルバイン	6月上旬～9月上旬（10日以上）	粉状	400倍	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬（15日以上）	液状	500倍	5

注）樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には薬害発生（葉縁褐変）の恐れがあるので避ける。

特産果樹

県生育観測ほのスチューベン（鶴田町境）の生育は、開花日が平年より**2日早い6月17日**、満開日は平年より**2日早い6月19日**であった。
7月は房づくりや病虫害防除などの作業を適期に行う。

1. スチューベンの果房整形

果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12～13cmになるように果房上部の支梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い支梗を切りつめる。

3. 摘 粒

- (1) **摘粒の時期**
果房形を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15～25日頃（7月中旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。
シャインマスカットは、大豆粒大（7mm程度）頃までに終える。

(2) **着粒数の目安**

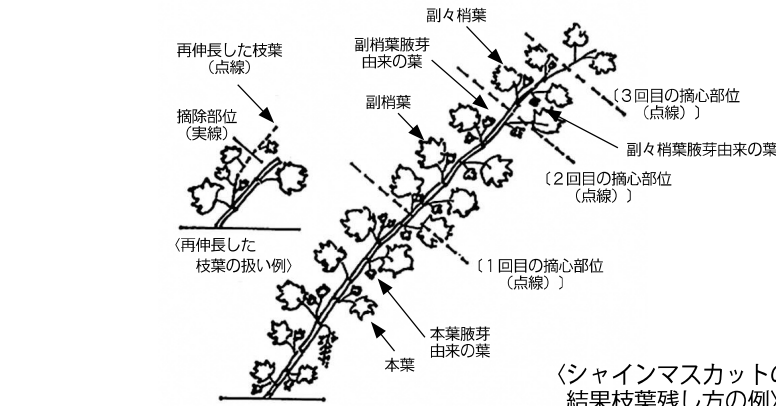
品 種	果粒数
スチューベン	70～80
キャンベル・アーリー	50～60
シャインマスカット	35～40

(3) **シャインマスカットの摘粒方法**

小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、1房35～40粒程度に仕上げる。早すぎる摘粒は、収穫時に小粒未熟果が混入しやすくなるので留意する。

4. 2回目以降の摘心

- (1) **スチューベン**
2回目の摘心は、副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行う。
1回目の摘心後に伸びた副梢を5～6枚を残して、摘心する。摘心部位の先端の副々梢だけを残して、他はすべて摘除する。
これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。葉枚数を早めに確保することが着色期及び成熟期を早めることになるが、着色が始まる頃には葉枚数を20～25枚は確保する。着色後には、新梢の生育が僅かに伸長する程度が望ましいが、その後もかなり新梢が伸びる場合は随時摘心する。
- (2) **シャインマスカット**
2回目の摘心は、副梢葉が8～9枚程度展葉した頃に5枚残して摘み取る。
3回目の摘心は、副々梢葉が5枚程度展葉した頃に3枚残して摘み取る。
本葉、副梢葉、副々梢葉の腋芽由来の葉と再伸長した枝葉は、いずれも随時（摘心時～摘心3日後頃）1～2葉残し、結果枝当たりでは概ね35～40葉残す。



5. 病虫害防除

■ 薬剤散布

（スチューベン）

散布時期	薬剤名と倍数			
	殺 菌 剤		殺 虫 剤	
大豆粒大 （7月中旬頃）	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	アグロスリン水和剤	2,000倍
	又はアミスター10フロアブル	1,000倍	又はアディオフロアブル	1,500倍
	又はストロビードライフロアブル	2,000倍	又はヨーバルフロアブル	5,000倍
		2,000倍	又はテッパン液剤	2,000倍
	又はホライズンドライフロアブル	2,500倍	又はスピノシン剤※	10,000倍

- 注）1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
2 晩腐病の発生が多い園地では、小豆粒大（7月上旬頃）にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
3 さび病の発生が多い園地では、大豆粒大（7月中旬）の時期にジマンダイセン水和剤又はアミスター10フロアブルを選択する。
4 ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。
5 ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。
6 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤、アディオフロアブル、スミチオン水和剤400 800倍、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。
7 ※スピノシン剤：ディアナWDG、デリゲートWDG

（シャインマスカット）

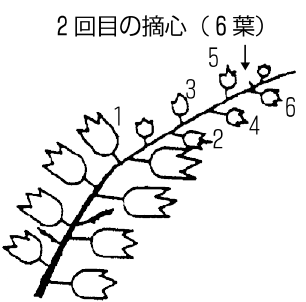
散布時期	薬剤名と倍数			
	殺 菌 剤		殺 虫 剤	
大豆粒大 （7月中旬頃）	アミスター10フロアブル	1,000倍	アグロスリン水和剤	2,000倍
	又はストロビードライフロアブル	2,000倍	又はアディオフロアブル	1,500倍
		2,000倍	又はヨーバルフロアブル	5,000倍
	又はホライズンドライフロアブル	2,500倍	又はテッパン液剤	2,000倍

- 注）1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
2 灰色かび病対策のため、長期貯蔵向けでは、袋かけ前の7月下旬～8月上旬にフルーツセイバー1,500倍を特別散布する。フルーツセイバーは薬剤耐性発達の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。
3 さび病の発生が多い園地では、大豆粒大（7月中旬）の時期にアミスター10フロアブルを選択する。
4 チャノイアザミウマの発生が懸念される園地では、大豆粒大（7月中旬）以降、袋かけ前まで10日間隔で散布する。7月下旬はアグロスリン水和剤、アディオフロアブル、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。また、薬剤散布後、薬液が乾いてから速やかに袋かけを行う。
5 ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。
6 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤、アディオフロアブル、スミチオン水和剤400 800倍、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを特別散布する。
7 ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。

6～8月は「農業危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は避のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。



《スチューベンの摘心方法》

おとうと

1. 収穫（晩生種）

適期収穫に努め、収穫遅れにならないようにする。また、灰心病やオウトウショウショウバ工対策として、収穫前に有効な薬剤を特別散布する。

2. 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3. 施肥（礼肥）

樹勢維持と花芽分化促進のため、収穫後できるだけ早く施肥する。施肥量は年間施肥量の20%程度とする。

4. 病虫害防除

■ 薬剤散布（県おとうと防除暦：佐藤錦の基準より抜粋）

散布時期	薬剤名と倍数		
	殺 菌 剤		殺 虫 剤
7月中～下旬（収穫後）	オーソサイド水和剤80 又はオキシラン水和剤 又はチウラム剤	800倍 600倍 500倍	※ハダニ類の発生に合わせて、殺ダニ剤を使用する。

注）褐色せん孔病（せん孔病）やハダニ類が発生すると早期に落葉し、次年産の花芽充実に影響するので、収穫後散布は必ず実施する。

野菜

トマト

1. かん水と追肥

- (1) かん水と追肥の間隔は毎日～1日おきで実施する。
(2) かん水は、水分要求量の高まる直前の午前8～10時頃に行う。
(3) かん水量は1.5％/株を基準とし、28℃以上の気温が予想される日は、2％/株とする。

- (4) 30℃以上の高温が予想される日は、通常のかん水では水分不足となるため、午後にも1回、1％/株程度の追加のかん水を行う。
(5) 2本仕立て苗の場合は、1株当たりのかん水量は1本仕立て苗の2倍量とする。

- (6) 1回当たりの追肥量は、窒素成分0.5kg/10a以内とし、10日間の窒素成分の合計2.0～2.5kg/10aを目安とする。3日以上日照不足が続く場合は水量を1～2割、肥料を1割減ずる。また、草勢に応じて追肥量を調整する。

〈早植えの作型 かん水と追肥量の目安〉

月 旬		かん水量/1株当	かん水間隔	10日間の窒素成分合計
7	上～下	1.5～2.2％（3.0～4.4％）	毎日～1日おき	2.0～2.5kg/10a

2. 葉面散布

- (1) 草勢の維持や葉先枯れ、ガク枯れ、落花を予防するため、メリット黄400倍を各段週2回程度、開花花房を中心に葉面散布する。

4. 病虫害防除

- (1) 曇雨天が続くと灰色かび病や葉かび病が発生しやすくなるので、薬剤の予防散布に努める。
(2) 高温乾燥でアザミウマ類、アブラムシ類、オオタバコガ、トマトキバガの発生が多くなるので、早期発見・早期防除を徹底する。

農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようにご注意ください。
- 暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です。
- 周りが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。

【農業の相談はこちらへ】

農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。

鶴田町農業支援センター 午前9時から午後5時 ☎22-2111（役場農業振興課）

「農事普及だより」及び「他の農作物生産情報等」は町ホームページにも掲載しております

URL <http://www.town.tsuruta.lg.jp/kurashi/kurashi-nougyou/post-117.html>

（農事普及だより）

（他の農作物生産情報等画）